

京鹿子

今四月十一日発行
昭和二十二年四月一日(由發行)



11月号

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その五十

発 信 は 花 野 の ポ ス ト 愛 娘

花 野 へ と 独 り 佇 む バ ス ス ト ッ プ

秒 殺 の 鳥 の 眼 や 秋 の 川

天 を 抱 く 朱 の 大 鳥 居 水 の 秋

神 灯 の 昂 り 合 う て 荒 神 輿

鬼 の 子 の 鳴 い て 保 身 の 糸 揺 ら す





後の月八坂に消ゆるうしろ影

部屋中に転がる玩具天高し

ぎすの野に四角四面の測量士

萩まつり五句

愛の木のここに幸汲む萩の宮

神と風何色と問ふ萩真白

候へば小御所に聞こゆ萩一首

名水の雨を拒まず宮の萩

地に還す色は持たざり宮の萩



— 近 詠 —

水の秋

鈴鹿 仁



一 村 を つ な ぐ 契 り や 烏 瓜
鯉 は ね て 村 百 軒 の 水 の 秋
ゆ く 雲 に 転 生 信 じ 秋 の 蛇
秋 声 や 山 の 稜 線 村 を 抱 く
筋 書 の な き 花 野 来 て 風 あ そ び

— 近 詠 —

和田 照海

里神楽

ど
く
だ
み
の
鎧
干
し
な
る
行
在
所

葦
蟹
の
も
の
の
ふ
歩
き
秋
津
島

青
北
風
や
網
打
ち
て
湖
絞
り
け
り

煩
悩
を
一
つ
ふ
や
し
て
衣
被

神
懸
り
し
て
ゆ
く
父
や
里
神
楽



松本 鷹根



遠碁

廃校門萩の呟き遠碁

流麗に更けゆく夜空風の盆

酔芙蓉禁酒の日日を肅肅と

かなかなの達者促す朝の試歩

芒晴れ愛宕六甲視野にあり

近 詠

塩貝 朱千

外輪船

敬と愛説く墨染の夏衣

夏霧や護摩壇の火の赫やかし

雷神の峰に近づく善男女

湖見え隠れ夏霧のロープウェイ

銀やんまに乗船許し外輪船

英華採集

喜雨しとど蚯蚓のをどる本能寺

京 都 津 野 洋 子

早続きのときの待望の雨が喜雨である。農作業に従事する人、水不足を解消する自然、にとつての雨の恵みは万物に生色を取り戻す。掲句は、喜雨と本能寺とを組み合わせることによつて誠に俳味の豊かな一句と成つている。言わずと知れた本能寺の変の史実が底辺にある。歴史の一般的な解釈は、信長の切腹と焼死に片付けられているが、色々な諸説が語られている。その諸説を借りれば、光秀にとつても信長にとつても喜雨となり、蚯蚓は本能寺に蠢く人間を比喻として捉えている、と言える。

夏草や集団といふ向う見ず

鎌 倉 畑 佳 与

夏草の伸びは辺りかまわず我が物顔に自分の生きている証しを見せつけている。本来なら小まめに雑草取りに精を出せば良いのだが、日中の暑い時に庭に出る人もいないであろうから、それだけ伸び放題を助長させていることになる。この夏草と取り合わされた中七下五の十二音は、人間の特性を上手く掴んでいる。一人では何も出来ない者が、集団となると人間の陰湿なものを引き出してくる。抑制されたものが解かれると考えも付かない行動を生むのである。

すべるとぶみな水になる水あそび

荒 尾 荒 尾 かのこ

幼い子供達の夏の遊びと言えば、水遊びが定番であろうか。ビニール製の空気を入れて膨らませて出来る小さなプールではあるが、彼等にとつては、大きな楽しい遊び場である。滑つたり跳んだりして狭いながらも大いに燥いでいる彼等には束の間の楽園に違いない。「みな水になる」という表現が、子供達の楽しんでいる様子を的確に言い得ている。指の動きが鈍いのである。梅雨空と薬指の設定で、女性の心の機微がよく描かれている。

神麓集

星月夜 藤岡紫水

折々の雨に芙蓉の酔ひそびれ
睡蓮に雨の輪見えて雨を見ず
地の窪に溜るどんぐり一家族
日の翳る音して一葉また一葉
美しき嘘透けて見ゆ星月夜

柚子 沼田巴字

断捨離てふことばありけり黄落期
歲月は人を待たざり柚子は黄に
そよぐ葉のみなうるはしき翁の忌
老人に納得多し秋深む
抜きん出て吹かれてをりぬ枯芒

泣き黒子 丸井巴水

冥土への入口出口夏の古都
旅ごころ湧きて派手目の麻の服
逢瀬なき日々鶉篝の宙に揺れ
炎天へ七つ道具を腰に巻き
送り火や残るは戀の泣き黒子

すずめ色時 植村蘇星

風そよと令和一号落し文
新涼や双子の玉子吉とせり
山の端のすずめ色時秋の音
珍客やひと先づ手もと衣被
体重計気になる指針秋高し

神麓集

花野 北川孝子

つれづれに咲きて花野の火照りかな
花野ゆくすこし裏ある京言葉
風が風つなぎてゆるる花野みち
再会のまぶし花野の風の中
七彩の洗濯ばさみ秋の水

梅は実に 直江裕子

梅雨って好き皆と同じになれるから
衰へぬ思考さうめんのおぼつかな
梅は実に少年だんだんぶつきらぼう
肩ごしに立ちはだかる死苺食む
指あてて息たしかむるほうほたる

雑念 高木晶子

待宵草伸び何事心起こらざる
紅芙蓉今日の供養のために咲く
雑念に入ることせず蟬の声
終着の据り心地よ箱の梨
性善説白のまゝなる白芙蓉

棘のころも 伊藤希眸

野薊の枯れ果て棘のころも被て
立秋や介護疲れの眼二つ
秋明菊われに残生幾ばかり
わが影踏む残暑が痛いと言立てる
かなかなかな住所不明に由来して

神麓集

暑中見舞 奥田筆子

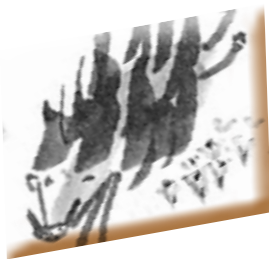
暑中見舞遠くの汽笛聞くやうな
オカリナや夏マフラーの浮遊かな
多羅葉の配りきれない夏渾沌
スポンジに吸水力減り百日紅
お互ひがひとつかみの藁暑のぼつち

かの一行 井上菜摘子

カーテンコールは遠き引潮銀河濃し
秋日傘ドラマー一つを棄ててきし
レモン滴らせ無かつたことにせず
八月やいづれの列も並ばない
秋へ乗船かの一行の翻る

赤とんぼ 村田あを衣

うきぐさの花の発心小指ほど
初恋は下書きのまま居待月
振り返る心得あらむ道おしへ
いちぬけてほほづき鳴らす里ごころ
忌を修す夕日返しの赤とんぼ





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

自分史の中に西日の小部屋あり

良寛へ子等の先触れあきあかね

マネキンの一步先行く処暑の街

終り無きドラマを紡ぐ梅雨の蝶

蜜豆食ふ段々解けてゆく会話

奥の間に人のこゑして梅雨上がる

つくづくと父似の気性まつり鱧

百々橋の辺りで返す土用の歩

創業は元治元年つばめ反る

待ち切れぬ自然解凍夏に入る

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

わくら葉の美しければひろひけり

西陣や盛夏織りこむ箴の音

夢ごち泡ひとつ抱く水中花

吹けばまた風の辻棲風知草

鉛筆のころがる先や秋暑し

今朝の秋言葉が烏とすれちがふ

天上は星逢ふ夜なり木のベンチ

みづからの蕊に汚れる秋の百合

爽やかや五穀の粥の美味なりし

コピ―紙に微熱の残る夜の秋

城陽 鷺山 珀眉

京都 片山 熙子

青葉木菟ひとり暮しといふ快樂

福 山 亀井 福恵

敗戦忘記憶の端が欠けはじめ

被爆ビル秋思の鳶を絡めをり

噴水の秀の法楽を極めけり

あめんぼうひとつ水輪の句読点

谷川の風をななめに赤とんぼ

二人あて個々の祈りや流れ星

空蟬の百を残せり峰の寺

遠かみなり正体なかなか近付かず

手火花に淋しき顔の並びをり

良き妻であたき危ふさ冷奴

追うてゐるつもりが追はれ秋暑し

少女より女のきざし虞美人草

仮縫ひのまま風あそびとんぼの子

嫌はれぬ程にひらひら黒揚羽

放心てふ心の隙間バラ崩る

残暑なほ指に纏はる縮れ髪

ふる里の野路菊あかり妣の空

廃校舎の錆びし黒板カンナ燃ゆ

鉢植糸のレモン初生り鈴を振る

喜雨しとど蚯蚓のをどる本能寺

掛香や謔かにこめる鳩居堂

梅雨深む古書肆に積まる見切本

命なきものの軽さを蟻が曳く

夏草や集団といふ向う見ず

ひとことにざらつく空気秋扇

晩学をくすぐる蛍点点

兄のほほの飯粒を食ふ盆仕度

すべるとぶみな水になる水あそび

朝がほの一つ含糊の苔かな

麻服や親しく風の吹くことよ

山おろし手櫛にかろき洗ひ髪

籐寝椅子いつもの父の隠れ蓑

バス駆け込む金髪の女汗しとど

七分丈子に脛毛あり夏の朝

夏座敷説法聞き入る赤子かな



京 都 津野 洋子

鎌 倉 畑 佳与

荒 尾 荒尾かのこ

アリソナ 伊吹 之博

高 槻 安田 優歌

京 都 菊池 和子

福 知 山 西村 白杼